

ヒトクローン胚研究についての意思決定に焦点を当てたウェブ教材開発

教職課程(福井)研究室

E05073 星野 秀輔

ヒトクローン胚研究については、日本では現在、指針により禁止されているが、目的を限定して容認する方向で指針改正のための検討がなされている(文部科学省, 2008)。このような問題には科学的な正答がないため、非専門家を含めた公共空間での社会的合意形成を図る必要がある(藤垣, 2003)。このとき、非専門家にも様々な立場を配慮した意思決定が求められる。しかし、現在の学校教育では、意思決定の練習の機会はほとんどない。先行研究では、ヒトクローン研究の是非について学生が意思決定する際に、生物・医学的可能性などの5つの要因を重視することが報告されている(福井・坂野, 2008)。この知見に基づき、ヒトクローン胚研究についての意思決定を行った上で、それを批判的に捉え直すための教材開発を目指した。このとき、ロールプレイ方式を用いた複線型のウェブ教材が有効であると考えた。以上により、次の手順で研究を進めた。

- (1) ヒトクローン胚研究に関する文献などから、研究の現状や賛否に関わる論点を整理する。
- (2) 教材開発の視点と教材の内容を決める。
- (3) ロールプレイ方式を用いた複線型のウェブ教材の開発を行う。
- (4) 学生を対象にウェブ教材の試行とアンケート調査を実施する。
- (5) 調査結果より、教材の有効性を検証する。

表. 各要因に対する重視度^{*1}

	本教材試行後 ^{*2} 平均値 (SD)	先行研究 ^{*3} 平均値 (SD)
生物・医学的可能性	4.80(±0.83)	2.63(±0.90)
発展競争	3.44(±1.03)	3.91(±1.03)
子孫継承	2.94(±0.98)	3.37(±1.22)
女性の視点	5.21(±0.53)	2.37(±0.84)
生命の尊厳	4.13(±0.71)	2.48(±0.91)

研究の結果、ウェブ教材(延べ約150画面/1回当たり約15画面)が完成した。教材の試行は、学生が定められた期間にウェブサイトにアクセス

し、教材を受ける形にした。まず、学生は簡単な質問により、5つの立場に振り分けられる。次に、自らと同じ立場や異なる立場の意見や補足説明など、全ての意見に触れる。さらにもう一度、全ての意見を振り返った上で、最後にアンケートに答える。このように、自分と同じ意見も含めた様々な立場の意見に触れさせることが、本教材の特色である。

調査の結果、学生30名のうち、教材に取り組んだことによって、「関心を持った・少し持った」のは計28名(93.3%)、「理解が深まった・少し深まった」のは計29名(96.7%)であった。また、計14名(46.7%)の学生は、教材によって考えが「変わった・少し変わった」と答えた。「自分が考えていない意見もあって勉強になった」などのような自由記述回答からも、上記の特色が一定の成果をあげたことが窺える。また、表に示したように、先行研究における学生への意識調査ではそれほど重視されていなかった要因が、本教材の試行後では重視されていることがわかる。このことから、本教材は被験者の学生に対して、様々な意見や立場に配慮させ、自分の意見を批判的に捉え直すように促したことが示唆される。

今後は、今回用いたロールプレイ方式以外の手法を用いた教材や、ヒトクローン胚研究以外についての意思決定に焦点を当てた教材の開発などが課題である。

*1 各要因に該当する論点への回答(6点尺度)の平均値(値が大きいほど、その要因は重視されていると言える)

*2 教材に取り組んだ後、ウェブ上で回答(N=30)

*3 福井・坂野(2008)による学生への意識調査(N=128)